

本薬師寺の調査出土の瓦

—第197-8次

はじめに 本調査は、2019年3月18日から4月2日にかけて実施した、畦畔の補強工事にともなう立会調査である。調査区は中門と講堂に取り付く西面回廊の約8m西に位置する(図151)。調査区は総長約128m、幅0.8m、地表下0.2~0.7mで整地土の可能性のある遺物包含層を検出したが、顕著な遺構は確認していない。ただし調査区南端では、農業用水路に関わる攪乱から完形の軒瓦を含む良好な瓦磚類が出土したので報告する。

瓦磚類 本調査区からは軒丸瓦4点(6121A:1点、6276Aa:2点、6276E:1点)、軒平瓦8点(6641Ha:1点、6647G:2点、四重弧文:4点)、鬘斗瓦5点、丸瓦53点(13.6kg)、平瓦112点(21.3kg)が出土した。いずれも本薬師寺所用の瓦である。

図152に主要な軒瓦を掲載した。出土した軒瓦はいずれも本薬師寺創建瓦である。1は単弁八弁蓮華文軒丸瓦6121A、2~4は複弁八弁蓮華文軒丸瓦で、2・3が6276Aa、4は6276Eである。軒平瓦は5が偏行唐草文軒平瓦6641Ha、6・7が変形忍冬唐草文軒平瓦6647G、8・9が四重弧文軒平瓦である。軒瓦の組合せと堂塔との対応については、6121A-6647Gが金堂所用、6276Aa-6641Hが東塔、西塔、中門・南面回廊所用に想定されている(『年報1997-II』)。ただし、6276Aaについては金堂

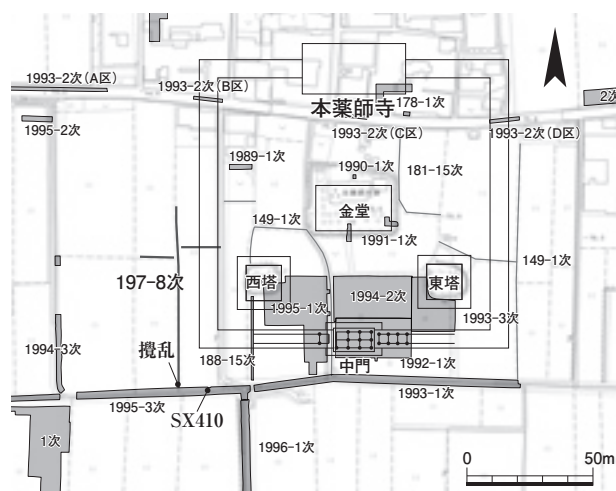


図151 第197-8次調査区位置図 1:3000

にも用いられたとされる。6276Eは金堂、東西両塔の裳階用の軒丸瓦である。四重弧文軒平瓦についてはこれまで出土量が少なく、どの建物の所用瓦かは不明である。ただし、本調査区内では4点と軒平瓦のなかではもっとも出土量が多い。付近に四重弧文を用いた何らかの建物があった可能性がある。

まとめ 本調査区出土の瓦は遺構にはともなっていない。ただし、調査区南端の攪乱から10m東では、本薬師寺1995-3次調査において瓦溜SX410を検出している(図151)。SX410は東西3.5m、南北1.5m、深さ0.5mの土坑状を呈し、さらに調査区外北へ広がる。埋土には瓦のほか多量の本屑が含まれ、伽藍造営のごく初期の整地に関わる遺構とされる(『年報1997-II』)。SX410出土瓦と、本調査区攪乱出土の瓦の様相は、本薬師寺創建瓦で構成されること、6121Aや6276Abの瓦当文様が比較的鮮明な段階であることなどが共通する。このことから調査区周辺にはSX410と同様の性格をもつ遺構が存在する可能性がある。

(石田由紀子)



図152 第197-8次調査出土軒瓦 1:4